
俺的解釈 インフィニット・ストラトス

阿利零斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺的解釈 インフィニット・ストラトス

【Nコード】

N5602S

【作者名】

阿利零斗

【あらすじ】

「なんで一夏はあんなに鈍感なんだよ！ 少しは人の気持ちを汲んでやれよ！」

……という文句がこうして二次創作に発展してしまいました。入試に始まり、数々の出来事を自分なりにアレンジし、補完していく???そんなことを目的に書いていこうと思っています。

プロローグ：入試本番

二月中旬のある日。本当ならこんな寒い季節は家から出ることなく静かに過ごしたいのに、こんな時期に限ってなにかと大事な行事が目白押しなのはなぜだろうか？ このような悪しき習慣がまだに残っているとは、じつに不可解なことだ？？と、俺は朝早くからそんな文句をぶつぶつとたれながら、見慣れぬ土地に敷かれた歩道をそそくさと歩いていた。

今日は一段と冷え込んでいるように思えた。両手を突っ込んだポケットの中ですら指先の感覚がなくなるくらい冷たいのだ。これでは真冬とさして変わらない。さつさと春になってくれないものだろうか。まあ、今更なに言っても遅いのだが。

「まったく、なんでこんな日に入試なんだよ。なんかの嫌がらせだろう。絶対」

極めつけは、これだ。とにかくなんといっても本日は俺の第一志望校の入試実施日なのだ。

正直に告白すると、俺はこの一年間、受験勉強なんてのはそんなにがつつりやり込んだということはないだろう。勿論、まったくやってない、ということではないにしろ、要はそこまで必死にならなくても受かる学校さえ選んでしまえばいいわけだ。そして、その条件の下でなおかつ『自宅から近い』、『学園祭は毎年開催される』、これらを満たしてさえいれば、俺はどの学校に入ろうとどうでもよかった。

そんなことを考えながら、よくある入試情報をまとめた分厚い本をテキストに読みあさっていると、まさに俺の理想とする物件を首尾よく見つけ出すことに成功したのだった。

?? 私立藍越学園。俺の自宅から約数キロ圏内にあり、毎年九月に二日間にかけて『藍越祭』なる行事を開催する。ただし、学費のお高く付く『私立』なのだ。両親が夜逃げして失踪した身分としては、これが唯一のネックだった。

だがそれは違った。この高校、卒業生の進路先がほぼ九割前後の確率で学校法人の関連企業なのだということだった。そのため、三年間でかかる学費は破格の安さを誇っていたのだ。細かい支出を大雑把に入れたとしても、公立高校と同じ程度。これなら払う身分の者にもなんとか了承してもらえるはずだ。

?? 『はずだ』、というのは理由がある。俺の家族はちよつとワケアリなのだ。さつきも述べた通り両親は失踪して行方知れず。貴重な親戚である母方の祖父は海外在住なもんだから、とてもそこまで行って養ってもらうわけにはいかず、結局、年の離れた姉一人だけが保護者ということになる。

この姉がとんでもない女だった。簡潔に言つと、“世界最強”だ。

二年前、ある競技が世界規模で開催されることになった。俺の姉は、あるうことにその記念すべき第一回大会で優勝した人物なのだ。まったくなんて性能なんだ。夜逃げした親からどうしてそんな逸材が生まれてくるんだよ。?? いや、逆に言えばその逆境を乗り越えてきた強さを持っているってことになるが…… まあいい。

とにかくそんなふざけた（もちろんいい意味で）出来の姉なもんだから、その都合で今は海外のどこかで関連する仕事に従事しているらしい。休暇の間に戻ってきて物資を提供してくれたりするが、本国での滞在期間は極端に短く、いつもすぐに見知らぬ国へと引き返していつてしまうのだった。

『はずだ』というのはそういうことだ。姉にはまだ進路のことは詳しく話していないし、相談を持ちかけたこともない。携帯は繋がらないことが多く、向こうでは忙しいからか通話もほんの少し経ったところで一方的に切られてしまう。

姉は多分、一生このままの暮らしを続けるのだと俺は思っている。だってそうだろう？ 仮にも世界の頂点に上り詰めた人間なのだから、働き盛りの今は仕事如山ほど控えている。

俺はといえば、そんな姉を支援してやるどころか、逆に世話をかけてばかりなのが現実だ。早いとこ就職するなりしないと、余計に迷惑をかけてしまうと思う。

そこで、入ってしまえばとりあえずは将来安泰の藍越学園だ。今日、無事にこの試験に合格しさえすれば、俺はこれから自立する道筋を立てられる。

……なのに。なのにだ。俺は気づいた。

「あ、あれ……試験会場、こっちの道で合ってるの……か？」

しまった。考え事をしているうちにかなりの距離を歩いていたよ

うだ。そのせいで、途中にあつた突き当たりのところをどう回ったのか、まったく記憶がない。周りにいた制服集団につられて、無意識に進んでしまっていたようだった。

引き返そうか、と考えながら携帯を開いて現在時刻を確かめる。??八時三十二分。集合時間はたしか九時のはずだ。この場合、あまり余裕はない。それどころか、どこで間違えたのか、そもそも本当に間違ったのかすらわからない。

歩調はそのまま上半身が硬直し、いやな緊張感が体を駆け巡る。周りの歩いている連中などあてにならない。どこを受験するのかわからない人間だ。藍越学園の試験会場を知ってますか、なんて急に尋ねるのも気が引ける。

ええい、かまうものか。こいつらについていった先で調べてみればいい。もし正しい道のりなら、何も問題はないのだから。

この、ちょっとしたズボラな判断が、後々になってさらに俺を力オスの淵へと落としていくとは、このときは知る由もなかったのである。

ブログ：入試本番（後書き）

さて、これから一体どうなるのか。

自分でもさっぱりですが、今後も続けてみたいと思います。

機体設定 その一（前書き）

本編に入る前に、白式、青雉、甲龍のオリ設定をまとめてみました。長いうえに、あくまで「若干変わってる程度」なので読まなくても支障ないかなあとも思ったのですが、前回とかなり日が開いてしまっているんで穴埋めに急いで書きました。

機体設定 その一

1 《白式》

名前の通り白を基調としたカラーリングで統一された機体。背面には翼を模したデザインの巨大なスラスタが付いており、これにより従来の機体よりも格段に高い機動力を持つ。その最高速度は第三世代の機体としては最速を誇る。

元々は倉持技研という日本の企業が第三世代型の新機軸となるフラッグシップ機として設計開発していた代物だが、あまりの性能に適応できるコアが見つからず長い間凍結されていた。しかしあるとき、かつてその驚異的な性能を以て世界を震撼させたという初代IS通称《白騎士》のコアが偶然にも某所にて発見され、突如現れた篠ノ之 束の手によってこの機体に転用されたことによって完全な機動が可能となり、晴れてロールアウトされるに至った。だが今度はコアが自らの性能に見合うだけの力量を持った操縦者の前でしか起動しなくなってしまったとされ、結局適格者は見つからないまま再び凍結されることとなった。よって片っ端から適合する人間を探し出すために日本各地のIS学園入試会場に持ち込まれ、受験者すべてに適正審査が追加で行われた。結果コアに選ばれたのは、なんと本来ISを扱えないはずの男子高校生（当時中学三年生）の、あろつことに第1回IS世界大会総合優勝および格闘部門優勝者である織斑 千冬の弟、織斑 一夏だった。

以上の経緯から直ちに機体はテストを中止し、IS学園に織斑一夏共々強制搬入されることとなった。

その過程で、脚部には飛行用とは別途に地上走行用のホバースタースターも付けられた。飛行時には使用しないので収縮されているが、操縦者が上体を大きく前に突き出すと動きに応じて展開され、軽快な地上走行を可能にする。また地上走行時には、背面のスラスターがブーストをかけると同時に、敵の追尾センサーを振り切るための『残像ダミー』を作り出すギミックが内蔵されているため、射撃に特化した機体ともしっかり渡り合えるだけの性能を持つ。これはIS学園に世界中から数多くの試験機が集まることを考慮し、慣れる時間のない操縦者にわずかでも善戦してもらいたいと倉持技研が急ピッチで最大限の改良を加えた結果である。

現在機体に搭載されている近接武器は《雪片式型》のみである。この武器には他のISに搭載されている兵器とは根本的に性質が異なる《零落白夜》という能力が内蔵されている。これは発動するとシールドエネルギーで形成された刃が新たに展開され、攻撃の際、直接的なダメージを一切与えることなく対象のシールド制御系統機器にのみ作用を及ぼす機能である。この効果が発動することにより、攻撃が命中した機体は一切破損することなく、一瞬で膨大な量のシールドエネルギーを消耗し、即座に一部機能停止に陥り、戦闘を続行することができなくなる。ただし代価としてこの機能は発動に大量のエネルギーを必要とするため、そのとき動力は基本的に機体のシールドジェネレーターから送られるほか、《雪片式型》の柄に直接取り付けられた小型バッテリーからも供給できるよう急ピッチでの応急処置が施されている。しかしながらバッテリーの動力によって展開可能な時間はほんの数秒でしかなく、一撃で使い果たしてしまう。

倉持技研はIS学園搬入直前になって本機専用の射撃武器《紫電式型》を完成させ、辛うじて機体の量子データ拡張領域に記録させ

たという。しかし、慌ててスタッフが記録してしまったせいで機体にバグが生じてしまい、以降書き込み不可の保護プログラムが作動したままの状態であるため、武装の追加が不可能となってしまった。ちなみにこの保護プログラムは篠ノ之 東のお手製であるという。

2 《ブルー・ティアーズ》

欧州連合による第三世代ISの幾多の兵装建造プロジェクトの一つである「BT兵器」の試験搭載、およびそのデータをサンプリングするため、イギリスにて開発された射撃戦特化型の機体。そのため武装のほぼすべてが「BT兵器」のバリエーションで構成されており、実弾装備がごく一部のみとなってしまうている。

主力武装は、機体のシールドジェネレーターからエネルギーを供給し、ビーム弾として打ち出すレーザー兵器《スターライトmk?》である。片手では持てないほど巨大な兵器だが、通常兵器と違って出力を自由に調節できる利点があり、《フルバースト・ミーティア》という名称が付けられた最大出力での発射は第二世代機を一撃で落とすほどの威力となる。また、実弾ではなく光線であるため、すぐれた弾速と追尾性能を持ち、非常に当てやすい。

そして肩から広がるスラスターには、この機体の名前の由来でもある《ブルー・ティアーズ》が収納されている。四機のビーム砲台と二機の特攻ミサイル型の合計六機で構成されるこの兵器は、あら

かじめプログラミングされた動きに従って六機が連携して一斉射撃を仕掛ける《オートモード》と、使用者が視認情報と思考投射によって自由に操る《ダイレクトモード》の二通りの操作が可能な「BT兵器」の最新鋭武装である。どちらの使用法にも一長一短があるため、使用者は状況に応じて使用法を見極めて使い分けなくてはならない。

また、「空中からの遠距離戦で敵を圧倒する」という本機のコンセプトに従い、武器以外にも多くの実験的な装備が搭載されている。たとえば背部には何層にも連なる実体シールド型のスラスタが取り付けられており、そのまま敵の攻撃を防ぎのに使うほかに、《スターライトmk?》を使った狙撃の際は環状に展開して機体の下半分をスカートのように覆い、補助スラスタとなって上体を固定し、空中においても安定した射撃を可能にする。

3 《甲龍（シェンロン／こうりゅう）》

中国にて燃費と安定性を第一に設計されたはずであったが、操縦者となった日本からの帰国子女である凰 鈴音のすぐれた身体能力に合わせ、IS学園入学に伴って日本再来時に独自の改良が施された近距離・中距離戦および格闘戦特化型の強力な機体。攻防一体の武器を巧みに操ることで真価を発揮する。機体のカラーは開発当初は赤み掛かった黒だったが、改良時に赤紫と黒に塗り替えられた。

《双天牙月》という超大型の青龍刀を二本持ち、主に格闘戦において使用する。非常に刀身が大きいためシールドとしても使用可能

なほか、連結して投擲武器として、また地面や障害物をスコップのように抉って吹き飛ばすなど、多彩な使用方法がある。一本ごとの重量も半端なものではなく、繰り出される一撃は相手の武装を破壊することも容易い。

中距離戦では《龍咆》という武器を主力として使う。この兵器は内部で特殊な振動を発振し、それによって空間に衝撃を与えることで「見えない障壁」を作り出すことができる兵器である。これを《面》として使用すると周囲の実弾兵器は機体に着弾することなく暴発し、《点》として打ち出せばそのまま衝撃砲となつて不可視の弾丸が対象めがけて一直線に飛んでいく。ただし以上のような使用は機体の限界に近い最大出力でのみ可能であり、通常では非常に狭い範囲でしか作用しない。また以上のような威力を生み出す発射の際には、兵器そのものが人体に深刻な影響を及ぼすほど強力な超音波を出すため、操縦者にもダメージが及ぶという諸刃の剣の一面もある。

操縦者である凰 鈴音は操縦テストにて《龍咆》の性質を利用し、通常時の《龍咆》の一撃で生み出される極小の圧力のかかった空間を足場にして、スラスターを一切使うことなく十七メートル上空を上がってみせた。ISを装着した状態で、なおかつ下半身の動作のみでこのような芸当をやつてのけるには相当な身体能力が必要であり、当初の開発コンセプトを受け継ぎながらもより格闘戦に特化した機体として強化可能な余地が出てきた。

そこで脚部はそれまで取り付けられていたスラスターが取り外され、日本にて《龍牙》という新型の武装が提供された。これは上空からの奇襲に用いられる強力な近接武器であり、先的要領で《龍咆》と連動することで従来のスラスターを使った飛行よりも小さな動力で飛翔を可能とした。

これらの機能によつて、機体そのものは非常に少ない力で十二分に力を発揮することができ、高性能なものになったが、同時に操縦者には総じて大きな負担を負わせるようになってしまった。

機体設定 その一（後書き）

……えっ？ 全然違うじゃないかって？

こまけえこたあいいんだよ！

第一話 入学式（ただしこれは想像以上にキツイ……？）（前書き）

やっとこさ第一話ですわ。これはしんどい……。
パラ。ス「ささ、どうぞお楽しみください」

第一話 入学式（ただしこれは想像以上にキツイ……？）

「誰か、この状態をなんとかしてくれ……」

《国立女子IS学園》入学式の新入生席にて、俺は焦燥と諦観のうめき声を上げた。

その悲痛な声を偶然拾ったのか、真ん中の通路を挟んで隣に座っていたおかつぱの女子が、なにやら怪訝そうな表情で俺の方を見ていた。

よもや《IS学園》に男子が入ってくるなど思いもよらないだろう。

心配ない。俺だってそう思っている一人だ。でも……なにを隠そう、俺がその『男子』なのだから、これはもういやになっちゃうね——などと、俺は勝手に頭の中で独白していた。それが果たしておかつぱの子に向けたものなのか、それとも自分自身に向けたものなのか——自暴自棄を続ける俺には、そんなことはすでに不明になっていた。

この状況をネットで流行の言葉っぽく表現するなら、「俺の将来が行方不明」といったところだ。——ん、なんか上手くなかったか？　だとしてももちろん俺の脳内発言だから誰も何も言わない。それでまた俺は激しい孤独と羞恥の感にさらされる。いっそ死にたい。

まず、「IS学園とは何ぞや？」というところから話すでしょう。

IS学園は『女子校』とされている。しかし男子IS学校とかいうのは存在しない。なぜか。今までISを操縦したのは女だけだったからだ。すなわち俺は真正正銘『女子校』に入学しようとしていることになる。

では《IS》とは？ それなんだが、少し長くなる。いやならさっさとスクロールするんだな。

永きにわたって温められ続け、ついに十五年前から本格始動した全世界共同次世代パワードスーツ開発計画——『project IS』。九年前、二十一カ国によるIS世界大会の開催を経て、ようやく各国が積極的に建造に着手しているここ数年だが、一般社会における実用化の検討に至るまでにはまだまだ様々な課題が控えている状態なのである。

そこで世界の先進国は、自国の優秀な機体の入手と優秀な操縦者の育成のために、かねてより日本の最南端にある無人島の沖ノ鳥島にて建設予定であった『新世界科学技術研究館』の計画を一新し、この島に『IS計画主導のためのユニバーサル・ハイスクール』を作ることにしたというわけだ。開発は一切を日本が負担することで、それまで論争になっていた広大な経済水域の主張権とIS開発技術の専制的な保有権を国連から保証された……というずいぶんアンタがみんなのボスでいいから、アンタの敷地にみんなの秘密基地建ててくれよや」ということらしい。

おかげで今の日本はISに関しては世界のトップであるとともに《IS国債》まみれの赤字国家という、ほとんど有名無実の称号を持つているわけで、偉い人たちがよく「これは名誉ではなく『国辱』

だ」とかメディアで発言することもあるが、『IS国債』は深刻な経済的影響を考慮して架空の通貨で取引されるため、一般の国民にしてみれば雲上の出来事だ。むしろ世界の万民に言わせると「格闘ゲームの題材にしかなくていない兵器まがいの物体を作ったところで、いまさら一体何になるんだ」とまで叩かれている始末なのだ。

——で、『どうしてお前がそのIS学園の入学式にいるのか』という疑問に応えることになるわけだが、正直なところをいうと俺にもわからない。

というか、誰でもいいから助けてくれ。頼む。もう、ありえないような非日常的な現象はいいです。現実キボンヌ。

「——それでは、新入生の皆さん、ご起立ください」

ここから遠目に見ると、なんだか細長い容姿をしている女性教師の声が、マイクに乗って『創立記念ホール』に響き渡る。髪は男のように短くしており、靴もどうやら運動靴っぽい形をしている。いかにもISの操縦者らしい体育会系の姿で、おまけにやけによく通る声なものだから、マイクなんて使わなくてもいいんじゃないかと思った。

その声がかかるのをまるで待ち構えていたかのように、新入生席の初々しい女子一同がさっと席を立つ。それに気づいたほんの一瞬の間、周りの女子達がいきなり体がぎゅんと伸びたように立ち上がるものだから、驚きのあまり俺は腰が抜けてしまった。

一瞬いやになって逡巡したが、それでも俺は立たざるを得なかつ

た。こ、これが本当に現実……だと……？　とか言いたいの山々でも、今はわめいたところでどうなることもない。

左の奥で、細長い教師が他の教師にマイクを代わるのが見えた。俺の席は最後尾の列だが、周りがみんな女子なので、頭一つ分くらいの方の視界はなんとか確保できていた。

マイクを受け取ったのはおそらく一組の担任の、今度はここからでもおどしているのがわかるくらい緊張した様子の、かなり若い女の教師だった。身長は他の教師もほとんどが女性であることを考えてもかなり低い部類で、それでいて胸はかなり大きく見える。ぱつと見て思った通り、見れば見るほど新人気質全開な見た目である。胸以外は。

「はい、ええー……名前を呼ばれましたら、呼ばれた生徒は返事をおねがいします。一年一組——」

口調もさっきの教師と比べるとどこか引き締まった厳格な感じがなく、トーンもむしろ可愛げのある高めな感じで、なおかつ緊張で若干上ずっているように思える。

こつも頼りないというか、どこか空回りしているような様子を露にすると、ちよつとこつちが応援してやりたくなる気分だ。

しかし、自分の名前は果たしていつ呼ばれることになるのか、と考えた瞬間、はつと我に返った。不意打ちはごめんだ。

そこで、知らぬ間に丸めていたプログラム用紙を急いで開き、怪しまれないよう目線だけを下げ、用紙の一番上の左端から名簿を読み進めていった。イレギュラーな『男子』だから一番最後といつこ

とも考えられたが、会場に入る前の簡単な合同説明の際はなにも言われていない。

……うわ、なんじゃこりゃ。

名簿に記された名前を一つ一つ見るまでもない。俺の名前は一番下の左端??一年一組の欄の外に無理矢理つけたような二重太枠の囲いの中に載っていた。

??特別入学生

織斑 おりむら 一夏 いちか??

「……まだいじめますかそうですか」

と、うつかり呟いてしまったそのときだ。前の列で立っていた一人の女子がこつちを振り向いた。

背は、さすがに俺ほどではないにしろ周りの女子のなかでひときわ高い。腰の辺りまで伸びた長い黒髪を、可愛らしい模様のプリントされたリボンで一カ所に束ねている。いわゆるポニーテールの見事な典型だ。首をふるったとき、それがはらり、と不思議な質感で揺れた。

その子が、若干眉をひそめた表情で俺を睨んでいる。こちらを向いて露になった顔の肌はうつすらと白く、透き通った色合いが長い黒髪と対照的で一層映えて、女性らしい柔らかな印象の顔を繊細に形作っていた。それなのに俺を睨んだ目がびつくりするほど鋭いのが、それらを包んでいるのが洗練された刃物を連想させる輝きであることを静かに表していた。

しまった、とまず無意識だったことを後悔した。その子の静かに放つ気迫みたいなものに押されて、悪い、と口にはできないから小さく会釈でもしてみせようと思ったのだが、とっさの出来事だったので、できないままその子は顔を戻してしまった。

が、こちらを見ていた子の顔に、俺は頭の中でなにか引つかかったようだった。だが一体何なのか、分かりかけた手前でなんだか靄がかかったように、急に思い起こせなくなる。まず、不覚にもこれが恋心というやつかもしれないと思ったが、そうではなかった。

もつと親しみのある感じがするのだ。あの子に??

「?? 佐久間 葵さん」

「はい」

ポニーテールの子の隣に立っていた子が返事をした。では、次に呼ばれるのが彼女の名前ということになる。

??さて、聞き覚えでもある名前だったりするのか?

「篠ノ之 箒さん」

「はい」

聞き慣れない名前に、ところどころの列から小さななどよめきが起くる。

当たり前だろう。「しののの」なんて姓の日本人は、そうそうそ

こいらには住んでいるはずがないのだから。

まして、下の名前は漢字そのままに「ほつき」と読ませるのだ。こうなるとさすがに同姓同名の人物は地球規模で洗い出さないとならないに違いない。

?? そうだ、そんな名前のヤツは一人しかいない。

すっかり思い出せなくなっていたのだ。なにしろ会わなくなつて、もうすでに六年になるのだから。「しののほつき」??とても懐かしい響きだ。

「?? 以上の二十九名に加え、一組には本年度より導入されました『特別入学生』が在籍します。……男子、織斑 一夏?? 君」

いきなり生徒の名前の下につけるのが「君」になったものだから、やはりそれまでの雰囲気が一ひっくり返つたようだった。

周囲のどよめく女子がどんなことを話しているのかは、いちいち聞かなくても大体察しがつく。

『やっぱりこの名前、男子だったんだ』

『でしょ、だってさっき見たもの』

……そんなところだろう。ある意味、普通の反応だ。

「??? はい」

だから俺は特に声を張り上げたりすることもなく、かといって極

度に緊張したりすることもなく、いたって普通の返事を返した。

それに、俺はさっきの鬱々とした状態とは打って変わって、今はむしろかなり調子がいい気がする。

何はともかく「しののの ほうき」だ。一刻も早くさっきの謝罪ついでに話があった。俺のことを覚えているか、今までどこで何をしていたんだ、なんでここに入ったんだ??聞きたいことは山ほどある。

そのことを考えると、これから何をしたらいいのか、わかってくる気がする。

そしてなにより、これから一人っきりで悩むことはないだろうと思えることが、今の俺にとって最大の救いだ。俺にとって篠ノ之 箒は、それほど信頼を寄せられる人物なのであったから。

「以上、計三十名。??では着席して下さい」

そして俺を含む生徒が席に着くのを確認すると、先ほど気にかけていた若い先生は深い安堵の表情を浮かべて、マイクの設置されたスタンドをあとにした。本当におつかれさまです先生。

それから入学式が終わるまでの間、どういうことか俺は憑き物がとれたような晴れ晴れした表情で過ごしていたのであった。

……しかし、こんなのはほんの序曲の、さらにその前のオーケストラのチューニングみたいなものであったことを、俺は早々に思い

知ることになるのであった。

第一話 入学式（ただしこれは想像以上にキツイ……？）（後書き）

王子「くそ、原作のスーパー第一巻は影も形もなかった……」
パラ。ス「只今全力を挙げて執筆させています。どうかお待ちを」

……なんか、すみません。

機体設定 その二（前書き）

本編だ**い**ぶ手こず**っ**てますo r t
と**い**うこと**で**尺稼**ぎ**

「オ**リ**メカ**見**てえ**ぜ**」**っ**て方**は**ぜ**ひ**読**ん**で**み**ると**よ**い**か**と

機体設定 その二

《インファント・オラージュ（ラファール・リヴァイヴ？カスタム機）》

フランスに本社を置くIS製造企業『デュノア社』の傑作機《ラファール・リヴァイヴ？》の特注仕様。通常の機体が緑色のカラーリングであるのに対し、本機はオレンジ色に塗装されている。内蔵された多数の武装を、独自に組み込まれた可変機構と織り交ぜながら使用することで驚異的な性能を発揮する。『インファント』は『子供』、『オラージュ』はフランス語で『嵐』の意味。

原作では量子化された武装を高速で呼び出して切り替えるのに対し、本作ではあらかじめ武装はすべて機体の内部に内蔵されている。

左右非対称のシルエットをしていて、右側は運動性を重視した軽装、左側は防御力を重視したシールド一体の重装甲となっている。なお、左腕の肘部分にはカウンター攻撃専用の剣・《マインゴースユ》が、そしてシールドの内側には、第二世代機の全武装中最大の破壊力を持つと言われる大型パイルバンカー《セイン・ランス》が取り付けられており、これを使用する際はシールドが変形して対象を捕縛する巨大なマニピュレーターとなる。代わりに右側の肩のアーマーが多機能ウェポンラックとなっており、接近戦用ブレード《ジュウイユーズ》、ジャミング効果がある弾丸を放つ散弾銃・《ミラージュ・ミストラル》を収納しているほか、手動操作不要で対IS専用自動追尾システムを導入したクラスター弾頭ロケットランチャー《フランベルジュ》が取り付けられている。

背面部には原型機の標準機構を廃し、中央にメインとなるスラスターが一基と、その両サイドに平たい形状をした大型スラスター四基（上面はシールドとしても機能する）の、合計五基が新たに取り付けられている。真後ろから見ると『・』字に付けられているこれは、推力を生成する本来の機能と同時に揚力を生み出す翼の役割を担うことができる高性能な装備であり、機体により多くの武装を追加するためにマシンの基幹となる部分を極限まで効率化させた結果とも言える。またこの部分も展開して『>・<』字に変形し、各スラスターの外側に取り付けられた合計四門のガトリング砲を撃てるようになる。つまりこの形態では従来のISで採用されている『ジェット機のような高速戦闘スタイル』と異なり、機体は対象を正面に捉えたままホバリング飛行し、『軍用ヘリコプターのような弾幕戦闘スタイル』になる。このときは急速な移動ができなくなるので、操縦者が状況を見極めることが重要となる。

脚部はもともと細身な部類であった原型機をよりスマートな形状に改良してあるが、踵の外側には用途に応じて事前に着脱可能なマイクロミサイルポッドのアダプターが付いている。この装備はコンテナ部分にもミサイルを撃ち尽くした後自動で射出されて相手に命中する爆弾としての機能があるほか、地上に設置してリモートコントロールで攻撃することも可能で、単機のみでも複数の位置から攻撃を仕掛ける手段として大きな役割を果たす。また、膝部分の装甲内部には各種射撃武器の予備弾丸が収納されている。

《シュヴァルツェア・レーゲン》

ドイツのIS運営企業団体が、軍で結成された開発チームと合同で完成させたワンオフ機。その名の通り全身は黒で染め上げられ、操縦者の身体との一体性を高めるためにどこか生物的なデザインが採用されている。また並外れた巨大な体躯の機体でもあり、歴代のISの中では最大サイズとされている。

軍による実戦的な機体の建造がコンセプトであり、その結果、これまでのようなヒト型ではなくむしろ多節動物を連想させる異形の外觀となった。これに加え基本的にISの操縦が女性にしかできないことも相まって、相手に威圧感と生理的嫌悪感を植え付ける怪物的イメージが付加されることになった。

従来のISアームと違い肘から先の部位が二つに分化しており、自立して動くサブアームとなっている。従来の機体と同じように操縦者の腕を覆っているアームは甲の部位に排熱機構を応用したヒートブレードがそれぞれ二本ずつ、サブアームには先端がマニピュレーターに擬態したワイヤーブレードが三基ずつ搭載されている。軍のIS操縦者養成カリキュラムの一環で搭乗者は体内にナノマシンが埋め込まれている（これによりIS適正を飛躍的に高めることができる）とされているので、これと情報を同期することでの確に対象めがけてブレードを飛ばし、対象にダメージを与える仕組みとなっている。またワイヤーの特性上、障害物に先端を打ち込むことで機体を安定させる支援機能も兼ねている。

背部にはメインスラスタが三基と、一門の大きなレールカノン

が搭載されている。大型であるゆえに可動範囲が小さく取り回しが難しい武装だが、重厚なシルエットをした砲塔から放たれる超電磁砲弾は絶大な威力を誇り、直撃すればISと言えど致命的なダメージとなる。普段はバレルが上下に分断された状態で収納されており、反転して翼のような形状になっている。

腰にはレアメタル製のトンファーが格納されているが、これはいずれかのアームに取り付けられた武装がパージされた時のみ使用することが可能。

実は本機の最大の機能は戦闘中に任意で可能な分離・変形機能であり、本機におけるあらゆる設計思想はすべてこの機能を活かすためのものである。そのため本機は操縦者の四肢を覆う装甲と一部の近接武器こそがまさに《本体》であり、残りの部分は分離することでリモートコントロール式のIS・通称《V・T・REX》（分離すると常時展開したままになるレールカノンが恐竜の頭部を模したように見えることから命名）《として半自立活動する。これにより機体が分離した際の機体は、さながら猛獣とその使いのごとく二点同時攻撃が可能となる。

機体設定 その二（後書き）

うーん、果たして出撃する機会はやってくるのだろうか……

あ、あと感想などありましたら、どなたでもOKですのでお待ちしております
ております

もう原作の原型留めてないので、この際、批判もどんと来いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5602s/>

俺的解釈 インフィニット・ストラトス

2011年10月9日00時13分発行